

平成 19 年度歯学部 FD 活動報告書

2008. 04. 18

歯学部 FD 委員会

目次

はじめに	2
第1節 学生による授業評価	3
第2節 共用試験 CBT 問題作成を通じた FD 活動	16
第3節 歯学部 F D 講演会	23
第4節 卒業時アンケート	29
第5節 今後の展望	32
第6節 平成19年度 F D 活動経費決算報告書	33

はじめに

歯学部では昨年度から学生による授業評価票を改善し、OCRによる機械処理をより効率化し、事務処理の効率化を図っているが、本年度もアンケートの回収とOCR処理は学務係（歯学）とともに行った。専門教育の全ての科目で実施し、複数回実施した教員も増えた。また、継続した目的指向型の教員組織化の試みとして、共用試験 CBT 作問過程をFD活動として捉え、教員組織を編成した。その結果、作問した問題の採択率は昨年を引き続き、高いものとなった。また、昨年度に引き続き、学部教育に関する3テーマについて問題点を共有すると共に、今後の授業や教育の改善に結びつく具体的な方略を探る事を目的としたFDワークショップを開催した。これらの活動を支援するために、学内サーバーを設置し、諸アンケートやシラバスデータの入力に活用し、また、情報発信用のサーバーを充実し、学生向けの e-learning の試行や講義室無線 LAN 環境整備も支援した。

本年度は、昨年度から開始した卒業時アンケートに加えて、既卒者を対象とした全学的なアンケートの一部として、歯学部教育に関する満足度や意見を聴取するためのアンケートを実施した。更に、全学的な授業公開・授業参観の活動を歯学部でも実施月間について要項を定め実施したが、未だ、その実施体制については試行段階であり、その実効性とも併せて今後の課題である。

第1節 学生による授業評価

■ 歯学部における学生による授業評価の概要

(1) 体制：歯学部FD委員会が年間のFD活動計画の一環として行っている。

(2) 評価を受ける（実施する）時期：授業評価は各科目の授業終了時に適宜行っているが、本年度も複数回の実施も試みた。集計時期は前期終了時の10月頃と、後期終了時の2月頃で、年度末に全ての集計結果を取りまとめる。

(3) 方法：歯学部で作成した「授業に対する学生評価表」を用い、15項目に亘って5段階評価をし、かつ、改善点や長所、短所についての自由記載をする。対象者は、その授業科目の担当教員であり、教授、助教授、講師である。無記名の評価表は学生クラス委員が集め、学務係へ提出し、OCR集計処理後、さらにFD委員会委員によって、内容の点検を行った後、当該教員へ戻される。教員は所見、感想などを記載し、より良い授業に向けての改善策を記入し、FD委員へ提出後、報告書として取りまとめる。

(4) 結果の公開：教員の各項目の評価集計結果と所見、感想などのまとめを教育センターの報告書に掲載するとともに、学部内向けに詳細なデータを掲載した報告書を作成し、学生、教職員に配布するとともに、学務係に常備し、また、ネットワーク上でも掲載し、学部内に公開する。

(5) 評価結果をどのようにして反映させているか：各教員が評価結果について真摯に受けとめた上で、所見、感想などを明記し、さらに、これらをより良い授業のための改善策として公表することによって、授業に対する教員の自覚と自己効力感の醸成に役立てている。各教員のまとめは匿名にしてWebにも掲載し、公開した。

■ 学生による授業評価のまとめ

各教員による自己評価と改善に関するまとめには、評点からクラス全体の傾向と個々のコメントから具体的な問題点を読み取った結果が記載され、この授業評価が一方向的なものではなく、双方向的な教員の授業改善の手法として機能していることが伺える。各教員による改善に関するコメントには、他の教員も参考になる具体的な改善方法が示されていることから、全文を歯学部教員に公開している。さらに、複数回の評価を実施し、改善法略の効果について検証している教員も増えている。

一方、学生のコメント数が少なく、全員の意見の反映には及ばないことも、継続して見られ、今後、さらに方法や内容を検討する必要がある。また、今回も予習復習の自己評価が低く、課外学習の在り方について対策を講じる必要がある。今後、e-learningシステムの充実を図り、より簡便で、双方向的な授業の組み立てが出来る様に教員を支援すべきであろう。

学生による授業評価票

歯学部 FD 委員会

200	年	月	日	科目名：	対象教員名：
-----	---	---	---	------	--------

※ 機械読み取りをしますので、○を丁寧に濃く塗り潰して下さい。紙を折らないで下さい。

※ 記入後、クラス委員が集め、歯学教務係に提出して下さい。

■ 記入学生に関する事項

記入者の学年	1 ☐	2 ☐	3 ☐	4 ☐	5 ☐	6 ☐
この授業の予習・復習を行ったか	5 ☐	4 ☐	3 ☐	2 ☐	1 ☐	
	(常に十分に 行った)	(良く 行った)	(普通に 行った)	(たまに 行った)	(全く しなかった)	

■ 対象教員の授業に関する事項

項 目	5：極めて 優れている	4：良い	3：普通	2：やや劣る	1：よくない
シラバスに沿った授業がなされたか	5 ☐	4 ☐	3 ☐	2 ☐	1 ☐
授業の主題・概要・到達目標等の説明があったか	5 ☐	4 ☐	3 ☐	2 ☐	1 ☐
授業の準備がよくなされていたか	5 ☐	4 ☐	3 ☐	2 ☐	1 ☐
教材(プリント、スライド、教科書、参考書、 板書等)は適切であったか	5 ☐	4 ☐	3 ☐	2 ☐	1 ☐
実習器具・材料は適切であったか	5 ☐	4 ☐	3 ☐	2 ☐	1 ☐
実習は授業内容の理解に役立ったか	5 ☐	4 ☐	3 ☐	2 ☐	1 ☐
明瞭で聞き取りやすい話し方であったか	5 ☐	4 ☐	3 ☐	2 ☐	1 ☐
質問や学生による発表の機会を与えられたか	5 ☐	4 ☐	3 ☐	2 ☐	1 ☐
質問をしやすい雰囲気であったか	5 ☐	4 ☐	3 ☐	2 ☐	1 ☐
学生にとって適切な難易度であったか	5 ☐	4 ☐	3 ☐	2 ☐	1 ☐
学習意欲が刺激されたか	5 ☐	4 ☐	3 ☐	2 ☐	1 ☐
教員が学問分野の専門家として信頼できたか	5 ☐	4 ☐	3 ☐	2 ☐	1 ☐
教育に対する熱意が感じられたか	5 ☐	4 ☐	3 ☐	2 ☐	1 ☐
総 合 的 な 評 価	5 ☐	4 ☐	3 ☐	2 ☐	1 ☐

本教員に 改善して もらいた い点を含 め、授業 の長所・短 所につい て記載し て下さい。	

学生による授業評価集計結果 【 学生による授業評価実施数 38 】

2 年生

■記入学生に関する事項

記入者の学年	2	2	2	2
この授業の予習・復習を行ったか	2.2	3.0	2.4	3.2

■対象教員の授業に関する事項

シラバスに沿った授業がなされたか	3.4	3.4	3.9	3.9
授業の主題・概要・到達目標等の説明があったか	3.7	3.3	3.7	4.0
授業の準備がよくなされているか	3.9	3.5	4.3	4.2
教材(プリント、スライド、教科書、参考書、板書等)は適切であったか	3.6	3.3	4.0	4.2
実習器具・材料は適切であったか	3.3	3.5	3.9	4.0
実習は授業内容の理解に役立ったか	3.4	3.4	4.1	3.9
明瞭で聞き取りやすい話し方であったか	3.6	2.7	3.9	3.8
質問や学生による発表の機会を与えられたか	3.6	3.2	3.5	3.8
質問をしやすい雰囲気であったか	3.1	3.2	3.8	3.6
学生にとって適切な難易度であったか	2.9	3.1	3.5	3.6
学習意欲が刺激されたか	3.2	3.3	3.5	3.6
教員が学問分野の専門家として信頼できたか	3.7	3.7	4.2	4.2
教育に対する熱意が感じられたか	3.6	3.6	4.2	4.0
総合的な評価	3.4	3.4	4.0	3.9

3 年生

■記入学生に関する事項

記入者の学年	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
この授業の予習・復習を行ったか	2.6	2.2	2.6	2.9	2.5	2.2	2.4	2.4	3.2	3.1

■対象教員の授業に関する事項

シラバスに沿った授業がなされたか	4.0	3.7	3.9	3.5	4.1	3.9	4.3	4.0	3.8	3.9
授業の主題・概要・到達目標等の説明があったか	4.1	3.9	4.0	3.7	4.0	3.9	4.3	4.0	3.4	4.0
授業の準備がよくなされているか	4.3	3.9	4.1	3.8	3.9	4.2	4.5	4.2	3.7	3.7
教材(プリント、スライド、教科書、参考書、板書等)は適切であったか	4.0	3.7	3.6	3.8	3.5	3.6	4.0	4.1	3.3	3.9
実習器具・材料は適切であったか	3.9	3.7	3.9	3.9	3.8	3.6	3.9	4.0	3.6	3.8
実習は授業内容の理解に役立ったか	3.8	3.7	4.2	3.9	3.9	4.0	4.0	4.0	3.9	4.2
明瞭で聞き取りやすい話し方であったか	4.3	3.3	3.5	3.9	3.8	3.9	4.2	4.2	3.3	4.1
質問や学生による発表の機会を与えられたか	4.3	3.8	3.8	3.8	4.0	4.0	4.2	3.9	3.5	3.8
質問をしやすい雰囲気であったか	4.0	3.6	3.6	3.8	3.7	3.8	4.5	4.1	3.5	3.6
学生にとって適切な難易度であったか	3.7	2.8	3.2	3.7	3.4	3.2	3.6	4.0	3.3	3.7
学習意欲が刺激されたか	3.9	3.1	3.6	3.6	3.8	3.4	3.8	3.6	3.4	3.8
教員が学問分野の専門家として信頼できたか	4.4	3.8	4.1	4.0	4.2	4.2	4.3	4.4	3.8	3.8
教育に対する熱意が感じられたか	4.3	3.8	4.0	3.8	4.3	4.1	4.4	4.1	3.5	3.5
総合的な評価	4.2	3.6	3.9	3.7	4.0	3.9	4.3	4.1	3.5	3.7

4 年生

■記入学生に関する事項

記入者の学年	4	4	4	4	4	4	4	4	4
この授業の予習・復習を行ったか	2.4	3.0	2.4	2.8	3.3	2.3	2.4	3.1	2.5

■対象教員の授業に関する事項

シラバスに沿った授業がなされたか	3.9	3.9	3.7	3.9	4.0	4.1	4.2	4.1	3.3
授業の主題・概要・到達目標等の説明があったか	3.9	4.0	3.8	4.0	3.8	4.1	4.2	4.1	3.8
授業の準備がよくなされているか	4.3	4.3	3.6	4.1	4.0	4.3	4.5	4.2	4.1
教材(プリント、スライド、教科書、参考書、板書等)は適切であったか	4.2	4.0	3.3	3.8	4.1	4.4	4.4	4.2	4.1
実習器具・材料は適切であったか	--	3.0	3.4	3.9	3.9	4.2	4.2	3.9	3.9
実習は授業内容の理解に役立ったか	--	4.2	3.6	4.0	4.1	4.2	4.4	4.0	4.0
明瞭で聞き取りやすい話し方であったか	3.9	3.7	3.4	3.6	4.1	3.9	4.4	3.9	4.3
質問や学生による発表の機会を与えられたか	4.0	4.1	3.8	4.0	3.8	3.9	4.6	3.7	4.2
質問をしやすい雰囲気であったか	3.6	3.2	3.3	3.6	3.8	4.0	4.3	3.9	4.0
学生にとって適切な難易度であったか	3.6	3.5	3.4	4.0	4.0	4.2	4.1	3.9	4.1
学習意欲が刺激されたか	3.8	3.8	3.2	4.1	4.0	4.1	4.0	3.8	4.2
教員が学問分野の専門家として信頼できたか	4.3	4.3	3.7	4.3	4.1	4.3	4.5	4.1	4.4
教育に対する熱意が感じられたか	4.2	4.1	4.0	4.2	4.1	4.1	4.4	4.0	4.4
総合的な評価	4.1	4.0	3.7	4.0	4.0	4.2	4.3	4.0	4.2

5 年生

■記入学生に関する事項

記入者の学年	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
この授業の予習・復習を行ったか	2.5	2.4	2.5	2.6	2.7	3.0	2.8	3.1	3.0	2.9

■対象教員の授業に関する事項

シラバスに沿った授業がなされたか	3.2	3.7	4.1	3.6	3.9	3.6	3.4	3.7	3.9	3.9
授業の主題・概要・到達目標等の説明があったか	3.0	3.8	4.2	3.6	3.9	3.5	3.4	3.6	3.9	4.0
授業の準備がよくなされているか	3.3	4.0	4.4	3.5	4.0	3.7	3.4	3.7	3.9	4.0
教材(プリント、スライド、教科書、参考書、板書等)は適切であったか	3.4	3.8	4.1	3.4	4.0	3.7	3.3	3.8	4.1	4.0
実習器具・材料は適切であったか	3.4	--	3.8	3.5	3.9	3.7	3.6	3.7	3.9	3.9
実習は授業内容の理解に役立ったか	3.4	--	4.1	4.0	3.8	3.5	3.6	3.7	3.9	3.9
明瞭で聞き取りやすい話し方であったか	2.7	3.8	4.3	3.6	4.0	3.5	3.6	3.0	3.8	3.6
質問や学生による発表の機会を与えられたか	2.9	4.0	4.2	4.0	4.0	3.5	3.3	3.5	3.8	3.9
質問をしやすい雰囲気であったか	2.7	3.3	4.0	3.4	4.0	3.4	3.5	3.4	3.8	3.9
学生にとって適切な難易度であったか	2.4	3.5	4.2	3.6	3.9	3.7	3.5	3.6	3.9	4.0
学習意欲が刺激されたか	2.7	4.0	4.2	3.7	3.9	3.5	3.5	3.5	3.8	3.9
教員が学問分野の専門家として信頼できたか	3.2	4.4	4.4	3.5	4.0	3.6	3.6	3.7	4.0	4.0
教育に対する熱意が感じられたか	3.0	4.3	4.2	3.5	4.1	3.5	3.5	3.4	3.8	3.9
総合的な評価	2.9	3.9	4.2	3.5	4.0	3.6	3.5	3.5	3.9	3.9

■記入学生に関する事項

記入者の学年	5	5	5	5
この授業の予習・復習を行ったか	3.1	2.5	2.3	3.6

■対象教員の授業に関する事項

シラバスに沿った授業がなされたか	4.1	3.6	3.8	4.6
授業の主題・概要・到達目標等の説明があったか	4.1	3.6	3.8	4.6
授業の準備がよくなされているか	4.2	3.9	4.0	4.4
教材(プリント、スライド、教科書、参考書、板書等)は適切であったか	4.1	3.5	3.9	4.5
実習器具・材料は適切であったか	3.9	--	--	--
実習は授業内容の理解に役立ったか	3.8	--	--	--
明瞭で聞き取りやすい話し方であったか	4.0	4.0	4.3	4.0
質問や学生による発表の機会を与えられたか	4.3	3.5	3.6	4.1
質問をしやすい雰囲気であったか	4.1	3.6	3.9	4.4
学生にとって適切な難易度であったか	4.0	3.6	4.1	4.5
学習意欲が刺激されたか	3.9	3.6	4.0	4.1
教員が学問分野の専門家として信頼できたか	4.1	3.9	4.1	4.2
教育に対する熱意が感じられたか	4.3	3.9	4.2	4.1
総合的な評価	3.9	3.7	4.2	4.6

6 年生

■記入学生に関する事項

記入者の学年	6
この授業の予習・復習を行ったか	2.3

■対象教員の授業に関する事項

シラバスに沿った授業がなされたか	3.6
授業の主題・概要・到達目標等の説明があったか	3.5
授業の準備がよくなされているか	3.9
教材(プリント、スライド、教科書、参考書、板書等)は適切であったか	3.8
実習器具・材料は適切であったか	3.6
実習は授業内容の理解に役立ったか	3.7
明瞭で聞き取りやすい話し方であったか	3.7
質問や学生による発表の機会を与えられたか	3.7
質問をしやすい雰囲気であったか	3.7
学生にとって適切な難易度であったか	3.7
学習意欲が刺激されたか	3.5
教員が学問分野の専門家として信頼できたか	3.9
教育に対する熱意が感じられたか	3.7
総合的な評価	3.7

学年平均

■記入学生に関する事項

記入者の学年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	全平均
この授業の予習・復習を行ったか	2.7±0.48	2.6±0.35	2.7±0.37	2.8±0.35	2.3	2.7±0.36

■対象教員の授業に関する事項

シラバスに沿った授業がなされたか	3.7±0.29	3.9±0.22	3.9±0.27	3.8±0.34	3.6	3.8±0.29
授業の主題・概要・到達目標等の説明があったか	3.7±0.29	3.9±0.24	4.0±0.15	3.8±0.39	3.5	3.8±0.30
授業の準備がよくなされているか	4.0±0.36	4.0±0.27	4.2±0.26	3.9±0.34	3.9	4.0±0.31
教材(プリント、スライド、教科書、参考書、板書等)は適切であったか	3.8±0.40	3.8±0.25	4.1±0.34	3.8±0.34	3.8	3.9±0.33
実習器具・材料は適切であったか	3.7±0.33	3.8±0.14	3.8±0.41	3.7±0.18	3.6	3.8±0.25
実習は授業内容の理解に役立ったか	3.7±0.36	4.0±0.16	4.1±0.23	3.8±0.22	3.7	3.9±0.25
明瞭で聞き取りやすい話し方であったか	3.5±0.55	3.9±0.37	3.9±0.32	3.7±0.45	3.7	3.8±0.41
質問や学生による発表の機会を与えられたか	3.5±0.25	3.9±0.23	4.0±0.27	3.8±0.39	3.7	3.8±0.33
質問をしやすい雰囲気であったか	3.4±0.33	3.8±0.30	3.7±0.35	3.7±0.43	3.7	3.7±0.37
学生にとって適切な難易度であったか	3.3±0.33	3.5±0.35	3.9±0.29	3.8±0.49	3.7	3.7±0.42
学習意欲が刺激されたか	3.4±0.18	3.6±0.24	3.9±0.30	3.7±0.38	3.5	3.7±0.33
教員が学問分野の専門家として信頼できたか	4.0±0.29	4.1±0.24	4.2±0.23	3.9±0.35	3.9	4.0±0.30
教育に対する熱意が感じられたか	3.9±0.30	4.0±0.32	4.2±0.15	3.8±0.40	3.7	4.0±0.34
総合的な評価	3.7±0.32	3.9±0.26	4.1±0.17	3.8±0.41	3.7	3.9±0.32

学生による授業評価集計結果と自己分析評価や具体的に改善した点 【 自己評価、改善点等の提出数 15 】

■記入学生に関する事項

記入者の学年	5
この授業の予習・復習を行ったか	3.6

■対象教員の授業に関する事項

シラバスに沿った授業がなされたか	4.6
授業の主題・概要・到達目標等の説明があったか	4.6
授業の準備がよくなされているか	4.4
教材(プリント、スライド、教科書、参考書、板書等)は適切であったか	4.5
実習器具・材料は適切であったか	--
実習は授業内容の理解に役立ったか	--
明瞭で聞き取りやすい話し方であったか	4.0
質問や学生による発表の機会を与えられたか	4.1
質問をしやすい雰囲気であったか	4.4
学生にとって適切な難易度であったか	4.5
学習意欲が刺激されたか	4.1
教員が学問分野の専門家として信頼できたか	4.2
教育に対する熱意が感じられたか	4.1
総合的な評価	4.6

■自己分析評価や具体的に改善した点

今年度は初めての講義、ということでスライド準備に手一杯で、自分自身に余裕がなかったように思う。次年度も同じ分野の担当のため、今年の経験を生かして更なるバージョンアップを行いたいと思う。特に、今年度は、こちら側から一方的に話すばかりで、質問する場面や学生に考えさせる場面がまるでなかった。もう少し、学生自身が授業に参加している感覚をもてるような工夫を行いたい。また、その日の授業のポイントをはっきり示す等、緩急をつけた内容に改善したいと思う。

■記入学生に関する事項

記入者の学年	3
この授業の予習・復習を行ったか	2.4

■対象教員の授業に関する事項

シラバスに沿った授業がなされたか	4.0
授業の主題・概要・到達目標等の説明があったか	4.0
授業の準備がよくなされているか	4.2
教材(プリント、スライド、教科書、参考書、板書等)は適切であったか	4.1
実習器具・材料は適切であったか	4.0
実習は授業内容の理解に役立ったか	4.0
明瞭で聞き取りやすい話し方であったか	4.2
質問や学生による発表の機会を与えられたか	3.9
質問をしやすい雰囲気であったか	4.1
学生にとって適切な難易度であったか	4.0
学習意欲が刺激されたか	3.6
教員が学問分野の専門家として信頼できたか	4.4
教育に対する熱意が感じられたか	4.1
総合的な評価	4.1

■自己分析評価や具体的に改善した点

概ね良好な評価が得られているようだが、今後の講義の改善の鍵は、「いかに学習意欲を刺激するか」にあると考えている。次年度は質問や発表の機会をより多く与えるようにすることで、もっと興味を持ってもらえるようにしたい。

■記入学生に関する事項

記入者の学年	2
この授業の予習・復習を行ったか	2.4

■対象教員の授業に関する事項

シラバスに沿った授業がなされたか	3.9
授業の主題・概要・到達目標等の説明があったか	3.7
授業の準備がよくなされているか	4.3
教材(プリント、スライド、教科書、参考書、板書等)は適切であったか	4.0
実習器具・材料は適切であったか	3.9
実習は授業内容の理解に役立ったか	4.1
明瞭で聞き取りやすい話し方であったか	3.9
質問や学生による発表の機会を与えられたか	3.5
質問をしやすい雰囲気であったか	3.8
学生にとって適切な難易度であったか	3.5
学習意欲が刺激されたか	3.5
教員が学問分野の専門家として信頼できたか	4.2
教育に対する熱意が感じられたか	4.2
総合的な評価	4.0

■自己分析評価や具体的に改善した点

「専門家としての信頼」や「教育に対する熱意」に関しては昨年同様に比較的良好な評価を得ているのに対して、「学習意欲が刺激されたか」については昨年の 4.1 から 3.5 と評価が下がっており今年度の問題と考えている。「質問・発表の機会」と「講義の難易度」でも 3.5 と評価が低いことから、今年度は、学生の理解にあった講義の進行が十分ではなかったと考えられる。理解が不十分であるため、学習意欲もわかなかったのではないかと考えている。今年度は、2 年生と 3 年生を同時に講義するために、複数のテーマについて同時並行して講義せざるを得ない状況が生じていた。これが、理解を妨げる原因の 1 つであったと考えている。次年度は、1 つ 1 つのテーマを順番に講義する計画である。また、学生諸君からの質問を受けることにより、理解の程度を確認しながら講義を進める予定である。

■記入学生に関する事項

記入者の学年	3
この授業の予習・復習を行ったか	2.5

■対象教員の授業に関する事項

シラバスに沿った授業がなされたか	4.1
授業の主題・概要・到達目標等の説明があったか	4.0
授業の準備がよくなされているか	3.9
教材(プリント、スライド、教科書、参考書、板書等)は適切であったか	3.5
実習器具・材料は適切であったか	3.8
実習は授業内容の理解に役立ったか	3.9
明瞭で聞き取りやすい話し方であったか	3.8
質問や学生による発表の機会を与えられたか	4.0
質問をしやすい雰囲気であったか	3.7
学生にとって適切な難易度であったか	3.4
学習意欲が刺激されたか	3.8
教員が学問分野の専門家として信頼できたか	4.2
教育に対する熱意が感じられたか	4.3
総合的な評価	4.0

■自己分析評価や具体的に改善した点

新カリキュラムと旧カリキュラムとの同時進行で行った変則的な授業であったため、学生の自主的な課題解決に関するグループ学習の時間的な余裕が少なく、双方向的授業が少なかったと云える。これは教材の適切さ、難易度の適切さの評価に現れているといえる。また、授業後の Web での教材提供が一部遅れた事も原因と考えられる。

難易度については、授業内容の量と質の基準を何処に置くかは、クラスの平均的学習到達度とより習熟している者あるいは遅れている者の到達度との兼ね合いで、何時も悩ましい問題であるが、多様な教材提供と、密接な学生との質疑によるきめ細かな個人指導により、改善しようと考えている。

■記入学生に関する事項

記入者の学年	2
この授業の予習・復習を行ったか	3.2

■対象教員の授業に関する事項

シラバスに沿った授業がなされたか	3.9
授業の主題・概要・到達目標等の説明があったか	4.0
授業の準備がよくなされているか	4.2
教材(プリント、スライド、教科書、参考書、板書等)は適切であったか	4.2
実習器具・材料は適切であったか	4.0
実習は授業内容の理解に役立ったか	3.9
明瞭で聞き取りやすい話し方であったか	3.8
質問や学生による発表の機会を与えられたか	3.8
質問をしやすい雰囲気であったか	3.6
学生にとって適切な難易度であったか	3.6
学習意欲が刺激されたか	3.6
教員が学問分野の専門家として信頼できたか	4.2
教育に対する熱意が感じられたか	4.0
総合的な評価	3.9

■自己分析評価や具体的に改善した点

総合評価の平均点 3.9 はやや満足しているが、7 項目は 4 点より低く評価されている。特に「学生にとって適切な難易度であったか」の評価が一番低いのは、講義内容が明らかに専門的なことを取り上げたことが難しく感じられ、時間不足から消化不良を起こしているからではないかと推定される。これと関連する「学習意欲が刺激されたか」の評価が同様に低くなっていることとも合致する。

したがって、授業の難易度や内容を再点検し、基本的知識の確認をしながら、将来臨床の現場でも応用が利く事項を繰り返し強調し、十分に理解できる方法を再考したい。具体的な方法としては、基本的な用語や典型的な疾患を課題にして、学生にグループディスカッションや発表の機会を与え、従来型の講義中心の授業から脱却した授業を目指し、学生の興味を引き出す授業の実施に努めたい。また、これらを実現するためにも日頃から授業の教材の収集が大切であると考えている。

■記入学生に関する事項

記入者の学年	5
この授業の予習・復習を行ったか	2.6

■対象教員の授業に関する事項

シラバスに沿った授業がなされたか	3.6
授業の主題・概要・到達目標等の説明があったか	3.6
授業の準備がよくなされているか	3.5
教材(プリント、スライド、教科書、参考書、板書等)は適切であったか	3.4
実習器具・材料は適切であったか	3.5
実習は授業内容の理解に役立ったか	4.0
明瞭で聞き取りやすい話し方であったか	3.6
質問や学生による発表の機会を与えられたか	4.0
質問をしやすい雰囲気であったか	3.4
学生にとって適切な難易度であったか	3.6
学習意欲が刺激されたか	3.7
教員が学問分野の専門家として信頼できたか	3.5
教育に対する熱意が感じられたか	3.5
総合的な評価	3.5

■自己分析評価や具体的に改善した点

テーマ別の講義に対応したグループ学習と課外の課題演習を中心とした授業構成であり、グループ作業については、自主的に取り組む学生とそうでない学生とで評価が分かれている。グループ学習を負担と考える学生は、マイペースを重視し、他者の意見を汲み取る事が不得手である。

診断学を中心とした科目では、多様な観点からのアプローチが必要で、他者の意見を汲み取ることも重要な技術であるので、この授業形式を変更することは難しいが、一方では、個人学習を支援する教材の開発も必要であろう。

現在は静的な Web 教材の提供に留まっているので、双方向的な学習支援システムの開発が必要であり、改善したい。

■記入学生に関する事項

記入者の学年	5
この授業の予習・復習を行ったか	2.7

■対象教員の授業に関する事項

シラバスに沿った授業がなされたか	3.9
授業の主題・概要・到達目標等の説明があったか	3.9
授業の準備がよくなされているか	4.0
教材(プリント、スライド、教科書、参考書、板書等)は適切であったか	4.0
実習器具・材料は適切であったか	3.9
実習は授業内容の理解に役立ったか	3.8
明瞭で聞き取りやすい話し方であったか	4.0
質問や学生による発表の機会を与えられたか	4.0
質問をしやすい雰囲気であったか	4.0
学生にとって適切な難易度であったか	3.9
学習意欲が刺激されたか	3.9
教員が学問分野の専門家として信頼できたか	4.0
教育に対する熱意が感じられたか	4.1
総合的な評価	4.0

■自己分析評価や具体的に改善した点

昨年度評価が低かった項目をふまえ、講義スライド取り扱った装置について、実際の装置を見せる、装置の模式図を作って説明する、臨床での使用例を提示するなどの工夫を行った。これらの工夫が評価の若干の上昇に繋がったと考えられた。しかし、いずれもごくわずかな上昇にとどまり、理解度や学習意欲の刺激といった項目ではむしろわずかに低下しており、総合評価も横ばいであったことから、今後、さらなる工夫が必要と考えられる。

■記入学生に関する事項

記入者の学年	3
この授業の予習・復習を行ったか	2.4

■対象教員の授業に関する事項

シラバスに沿った授業がなされたか	4.3
授業の主題・概要・到達目標等の説明があったか	4.3
授業の準備がよくなされているか	4.5
教材(プリント、スライド、教科書、参考書、板書等)は適切であったか	4.0
実習器具・材料は適切であったか	3.9
実習は授業内容の理解に役立ったか	4.0
明瞭で聞き取りやすい話し方であったか	4.2
質問や学生による発表の機会を与えられたか	4.2
質問をしやすい雰囲気であったか	4.5
学生にとって適切な難易度であったか	3.6
学習意欲が刺激されたか	3.8
教員が学問分野の専門家として信頼できたか	4.3
教育に対する熱意が感じられたか	4.4
総合的な評価	4.3

■自己分析評価や具体的に改善した点

次年度は、とりあえず評価が4以下の項目について改善したいと考えている。

- 1) 「実習器具・材料は適切であったか」(3.9)は、具体的に何が不適切なのか思いつかない。
したがって、実習中に学生のいろいろな意見を聞き出したいと考える。
- 2) 「学生にとって適切な難易度であったか」(3.6)は、「学習意欲が刺激されたか」(3.8)とともに低い評価であるが、この両者は関連していると思う。私の担当する範囲で最低限度、これくらいは理解しておいてもらいたいという内容であり、今後も内容の質や量をかえるつもりはない。学生ができるだけ理解し易いような方法なりを工夫し、努力したいと考える。
- 3) 学生にとって、CBT、卒業試験、国試などの対策に役立つならと考えて、試験やレポートを返却しているが、現在、その効果を把握できていないので学生の意見を聞きたい。

■記入学生に関する事項

記入者の学年	3
この授業の予習・復習を行ったか	2.6

■対象教員の授業に関する事項

シラバスに沿った授業がなされたか	3.9
授業の主題・概要・到達目標等の説明があったか	4.0
授業の準備がよくなされているか	4.1
教材(プリント、スライド、教科書、参考書、板書等)は適切であったか	3.6
実習器具・材料は適切であったか	3.9
実習は授業内容の理解に役立ったか	4.2
明瞭で聞き取りやすい話し方であったか	3.5
質問や学生による発表の機会を与えられたか	3.8
質問をしやすい雰囲気であったか	3.6
学生にとって適切な難易度であったか	3.2
学習意欲が刺激されたか	3.6
教員が学問分野の専門家として信頼できたか	4.1
教育に対する熱意が感じられたか	4.0
総合的な評価	3.9

■自己分析評価や具体的に改善した点

(総合コメント) この学生諸君の評価は私が普段、自分の欠点であると自省している事と、ほぼ一致している。それ故、今後の改善点の方向性が明確に考えられるし、且つ、評価点はこれから、向上するだろうと確信している。

(分析と改善対策) ①上記表にあるようにまず目につくのは難易度の評価の低さである。学生諸君の具体的記述から、難易度が高く、理解しにくかったと判断できる(非常に分かりやすかったとの評価もうけている)。本授業の難易度は高くはない。難易度が高いと誤解される理由に、(1)理解してもらおうと、多角的に説明してしまった(これが、学生諸君の理解の混乱を生じた様である、話を単純化して終わらせるか、重要点を明示したレジメが必要?)。(2)数式を使った説明をしてしまった(グラフからある程度は推測できるので、その見方を教える方が良いのかもしれない)。②話し方も低い評価を受けた。時間内に終わらせようと、早口に喋っている場合と、説明事項を分かりやすく例えるため、他の面から説明しようと必死に喋っている場合が考えられる。講義以外も普段から早口で喋りがちであるので、間を置くよう意識する。また、話を単純化して、余計な事を話さないのも手であると思う。理解できる事が多くなると、学習意欲も向上すると考えられるので、上記2点の改善が即急、且つ中心となろう。

■記入学生に関する事項

記入者の学年	5
この授業の予習・復習を行ったか	2.5

■対象教員の授業に関する事項

シラバスに沿った授業がなされたか	4.1
授業の主題・概要・到達目標等の説明があったか	4.2
授業の準備がよくなされているか	4.4
教材(プリント、スライド、教科書、参考書、板書等)は適切であったか	4.1
実習器具・材料は適切であったか	3.8
実習は授業内容の理解に役立ったか	4.1
明瞭で聞き取りやすい話し方であったか	4.3
質問や学生による発表の機会を与えられたか	4.2
質問をしやすい雰囲気であったか	4.0
学生にとって適切な難易度であったか	4.2
学習意欲が刺激されたか	4.2
教員が学問分野の専門家として信頼できたか	4.4
教育に対する熱意が感じられたか	4.2
総合的な評価	4.2

■自己分析評価や具体的に改善した点

総合的な評価は昨年と同じであり、全体としては、まずまずの評価だった。

講義プリントを1回前の授業の時に配布して、学生が予習できるように配慮したが、「授業の予習・復習」の項目はたいへん低調で、自主的に授業の準備を行わせることの難しさを感じた。また、特別講師を3名(内2名は新規)としたことと、実習を5月から開始しなければならなかったため、総論の途中であっても実習に関連する各論の項目を先行させなければならず、カリキュラムを総論から各論へ順番に行なえない事態が生じた。しかし、これに関連した「シラバスに沿った授業」や、「授業の主題・概要・到達目標」の評価がそれほど低くなかったのは、4.4を示した「授業の準備」について、きめ細かく講義資料の作成を行った結果と考えられる。

毎年評価が3点台の「質問をしやすい雰囲気」が、初めて4.0になり、改善が見られた。

「実習器具・材料」の項目が3.8と極端に低かった。これは使用した第3実習室の機械器具が歯学部創設後、一度も更新されていないために故障が多く、実習遂行に多大な支障が発生したためと思われる。これは個人の授業評価ではなく実習環境全体の問題であるため、来年度こそ概算要求による実習室改修費用の確保を期待する。

■記入学生に関する事項

記入者の学年	5
この授業の予習・復習を行ったか	2.5

■対象教員の授業に関する事項

シラバスに沿った授業がなされたか	3.2
授業の主題・概要・到達目標等の説明があったか	3.0
授業の準備がよくなされているか	3.3
教材(プリント、スライド、教科書、参考書、板書等)は適切であったか	3.4
実習器具・材料は適切であったか	3.4
実習は授業内容の理解に役立ったか	3.4
明瞭で聞き取りやすい話し方であったか	2.7
質問や学生による発表の機会を与えられたか	2.9
質問をしやすい雰囲気であったか	2.7
学生にとって適切な難易度であったか	2.4
学習意欲が刺激されたか	2.7
教員が学問分野の専門家として信頼できたか	3.2
教育に対する熱意が感じられたか	3.0
総合的な評価	2.9

■自己分析評価や具体的に改善した点

①「授業の難易度」や「教員が学問の専門家として信頼できたか」の評価項目を設けるのは問題である。1回の授業のみで、しかも学生の十分な予習・復習なくして、「授業の難易度や専門家としての信頼度」が評価ができるのか疑問である。授業の到達目標のためには、授業内容やレベルを下げる必要性よりも、むしろ学生の予習・復習に対する自己啓発が重要な課題であると考えられる。もちろん教員自身も学生の理解を深めるための授業形態や教材の作成法について模索しつつ改善に努めている。

②授業での話し方等については確かに反省点も多い。学生の理解度や授業に対する雰囲気を確認しながら、双方向授業にさらに努めていきたい。

■記入学生に関する事項

記入者の学年	4
この授業の予習・復習を行ったか	2.8

■対象教員の授業に関する事項

シラバスに沿った授業がなされたか	3.9
授業の主題・概要・到達目標等の説明があったか	4.0
授業の準備がよくなされているか	4.1
教材(プリント、スライド、教科書、参考書、板書等)は適切であったか	3.8
実習器具・材料は適切であったか	3.9
実習は授業内容の理解に役立ったか	4.0
明瞭で聞き取りやすい話し方であったか	3.6
質問や学生による発表の機会を与えられたか	4.0
質問をしやすい雰囲気であったか	3.6
学生にとって適切な難易度であったか	4.0
学習意欲が刺激されたか	4.1
教員が学問分野の専門家として信頼できたか	4.3
教育に対する熱意が感じられたか	4.2
総合的な評価	4.0

■自己分析評価や具体的に改善した点

授業への聞きやすさと熱意へのモチベーションをあげるために現在の歯科医療と歯科医師のありかたを触れながら講義を行った。

■記入学生に関する事項

記入者の学年	5
この授業の予習・復習を行ったか	2.4

■対象教員の授業に関する事項

シラバスに沿った授業がなされたか	3.7
授業の主題・概要・到達目標等の説明があったか	3.8
授業の準備がよくなされているか	4.0
教材(プリント、スライド、教科書、参考書、板書等)は適切であったか	3.8
実習器具・材料は適切であったか	--
実習は授業内容の理解に役立ったか	--
明瞭で聞き取りやすい話し方であったか	3.8
質問や学生による発表の機会を与えられたか	4.0
質問をしやすい雰囲気であったか	3.3
学生にとって適切な難易度であったか	3.5
学習意欲が刺激されたか	4.0
教員が学問分野の専門家として信頼できたか	4.4
教育に対する熱意が感じられたか	4.3
総合的な評価	3.9

■自己分析評価や具体的に改善した点

「シラバスに沿った授業がなされたか」については、ほとんどの学生がシラバスを読んでいないという事実があり、学生はシラバスを読まずに評価していることになる。学生は何を基準に評価したのか疑問が生じる。

「質問しやすい雰囲気であったか」については、授業中には、なかなか質問しづらいだろうからと思い、オフィスアワーを積極的に設けて、学生にもアナウンスしているのだが、一人も質問に来ない。その理由についても備考欄には何も書いてない。こちらに対応に苦慮している。学生側にも問題があるのではないだろうか。

「学生にとって適切な難易度であったか」については、「この授業の予習・復習を行ったか」の最も低い評価と大いに関連がある。すなわち、学生は予習も復習もしないで授業に出て、授業が難しいと言っているのである。当たり前である。学生が予習や復習を十分やって、しっかり勉強すれば、学生にとって「適切な難易度」になるだろうし、自ずと疑問が沸いて、質問したくなるだろう。オフィスアワーを利用して質問に訪れるだろう。このことはC B Tや卒業試験、さらには国家試験の結果にも影響する重要なことであり、今後の学生諸君の学習意欲の向上を切に望む次第である。

■記入学生に関する事項

記入者の学年	4
この授業の予習・復習を行ったか	3.3

■対象教員の授業に関する事項

シラバスに沿った授業がなされたか	4.0
授業の主題・概要・到達目標等の説明があったか	3.8
授業の準備がよくなされているか	4.0
教材(プリント、スライド、教科書、参考書、板書等)は適切であったか	4.1
実習器具・材料は適切であったか	3.9
実習は授業内容の理解に役立ったか	4.1
明瞭で聞き取りやすい話し方であったか	4.1
質問や学生による発表の機会を与えられたか	3.8
質問をしやすい雰囲気であったか	3.8
学生にとって適切な難易度であったか	4.0
学習意欲が刺激されたか	4.0
教員が学問分野の専門家として信頼できたか	4.1
教育に対する熱意が感じられたか	4.1
総合的な評価	4.0

■自己分析評価や具体的に改善した点

昨年の反省をふまえ、配付資料の充実、繰り返し話す等を配慮した。

今後、学生による発表の機会を増やす工夫や、質問をしやすい雰囲気作りなどを試み、学生参加型の授業となるようにしたい。

■記入学生に関する事項

記入者の学年	3
この授業の予習・復習を行ったか	2.2

■対象教員の授業に関する事項

シラバスに沿った授業がなされたか	3.9
授業の主題・概要・到達目標等の説明があったか	3.9
授業の準備がよくなされているか	4.2
教材(プリント、スライド、教科書、参考書、板書等)は適切であったか	3.6
実習器具・材料は適切であったか	3.6
実習は授業内容の理解に役立ったか	4.0
明瞭で聞き取りやすい話し方であったか	3.9
質問や学生による発表の機会を与えられたか	4.0
質問をしやすい雰囲気であったか	3.8
学生にとって適切な難易度であったか	3.2
学習意欲が刺激されたか	3.4
教員が学問分野の専門家として信頼できたか	4.2
教育に対する熱意が感じられたか	4.1
総合的な評価	3.9

■ 自己分析評価や具体的に改善した点

今年は1回だけのアンケートを実施したが、回収率が48.1% (=25/52) と低く、残念に思う。昨年も、低い回収率であったが、何事にも無関心な学生気質になっていることに、危機感さえ覚える。自由記載欄に記入してあったのが、25名中15名であった。その内訳はパワーポイントの切り替え時間が早すぎる=6名、何が重要か不明確=3名、配付資料の充実=3名と批判的なものが12名、一方、配付資料が良い、画面が見やすいなどの賞賛的なものが3名であった。すべての評価点が昨年より低くなっており、特に学生にとって適度な難易度であったかについては、3.2という過去最低の評価を受けてしまった。一方、この授業の予習・復習を行ったかも2.2と過去最低であり、自分の勉強不足を度外視しての批判と要望であると感じざるを得ない。「学習意欲が刺激されたか」も3.4と低いことも残念に思う。昨年は3.6、2年前までは4.2であった。現在の入試制度では文系の学生が多く入学しており、数式や化学式が出てくるだけで、難しいと逃避してしまう学生が多いように感じる。何事にも興味をもって学習に望んでほしい。

しかし、批判に対しては、真摯に受け止め、可能な限りの対応はするつもりである。画面の切り替えについては、講義内容の見直しを含め、次年度は意識的に、さらにゆっくりするつもりである。また、講義資料は配付方式を含め、再検討する予定である。

第2節 共用試験 CBT 問題作成を通じた FD 活動

■ 教員の組織化

歯学教育コア・カリキュラムに準拠する CBT 用の問題作成を通じて、コア・カリキュラムが教育の場面でも生かされる様になることを目指して、本年度も継続して、学部教育委員会共用試験実施部会とともに、CBT 問題作成過程を歯学部 FD 活動の一環と捉え、教員を組織化して活動を行った。各分野から 1 名の作問委員（計 21 名）を選出し、グループを作り、全教員を対象とする FD 講演会と各グループ作業を行いながら、問題作成とそのブラッシュアップを行った。本年度は取りまとめ役となるタスクフォースを昨年に比し減らし、6 名とした。

■ CBT 作問活動と成果

詳細な実施経過は省略するが、本年度は約 6 か月間に及ぶ作業期間中、各グループでは毎週のミーティングとともに、日々、電子メールを用いた意見交換やファイルの転送を行い、スムーズに作業を進めた。FD 活動として教員を組織化する際には、明確な目標をもち、また、集中的に活動する方が、達成感が得られやすいと考えられ、今後もこの様な目的指向型の短期組織化を継続、充実させたいと考えている。また、その成果として採択率は昨年に引き続き高いものとなり、一定の成果もあげたと言える。さらに、この共用試験に対応した基礎歯学特別講義を本年度も継続して設け、実質的なカリキュラム改善にもつながったといえる。

平成 19 年度 CBT 問題作成 FD 研修会報告

歯学部共用試験委員会 CBT 作問作業部会
歯学部 FD 委員会

平成 19 年度の CBT 問題作成 FD 研修会は下記の要領で行われた。

実施責任者：歯学部 FD 委員会委員長 馬嶋 秀行

日 時：平成 19 年 12 月 5 日（水） 17:30～19:00

場 所：歯学部第 3 講義室

内 容：

（司会）宮脇 正一

（挨拶）植村 正憲 馬嶋 秀行

（講演 1）伴清 治

（講演 2）梶山 加綱

（講演 3）西原 一秀

（講演 4）岩下 洋一朗

参加者：歯学部・大学病院の教員 90 名

要旨

（講演 1）

学生の成績から判断する問題の質

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 先進治療科学専攻

顎顔面機能再建学講座 歯科生体材料学分野

卒業試験実施部会 伴 清 治

CBT 問題および卒業試験問題の成績データを用いて、何が良い問題なのか、良くない問題なのかを解説した。

良い問題とは、学習による知識の習熟成果が客観的に評価できる問題であり、良くない問題とはその逆である。すなわち、正答率が 100% 近くて学習しなくてもできる、正答率がきわめて低く学習成果が正当に評価できていない問題である。また、識別指数が低い問題も良くない問題となる。すなわち、正答率と識別指数で問題の質を判断することが客観的な問題評価となる。

ここで、識別指数とは下表のように、成績上位群と下位群の中の正解者数と不正解者数を求め計算式に代入して求められる。

	正解者数	不正解者数
試験全体得点上位群	a	b
試験全体得点下位群	c	d

$$\text{識別指数} = (ad - bc) / (\sqrt{(a+b)(c+d)(a+c)(b+d)})$$

上位群と下位群は対象受験者数により 1/4 にするか、1/2 にするかが異なっている。

受験者数	200 名以上	200 名以下
試験全体得点上位群	上位 1/4	上位 1/2
試験全体得点下位群	下位 1/4	下位 1/2

識別指数により以下のように、一般に判断されている。

識別指数 > 0.5 希（良）

>= 0.25 適当

<= 0.15 質的に疑問

CBT 事後評価解析小委員会は CBT プール問題の採用判定をすることが主な仕事であるが、正答率と識別指数で主に判定することになっている。判断基準を明らかにすることはできないが、特定の数字以下または以上が削除される。

CBT および卒業試験において、正答率が低く、識別指数が低く良くないと判定される問題は以下のような共通点がある。

1. 画像が不備：ピントが甘い等、視野が限定されておらず重要な部分が認識しにくい。
2. 微妙な差：特性値の数字が微妙な違いしかない。
3. カタカナ英語
4. 化学式
5. 一般的でない特殊な器具、物質が対象
6. SBOの不一致
7. 個人差があるもの
8. 異常な行為

上記のような問題は極端に正答率が低く、識別指数が低い場合が多い。従って、この逆になるようにすれば、良い問題が作成できることになる。

(講演 2)

CBT の作問方法について－共用試験実施評価機構の考え方－

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 先進治療科学専攻
顎顔面機能再建学講座 歯科麻酔全身管理学分野
梶 山 加 綱

「なぜ、CBT が必要なのですか?」「なぜ、視覚素材が重要なのですか?」「なぜ、写真は美しくないとダメなのですか?」「なぜ、連問で異なる写真が要るのですか?」「なぜ、毎年、新作問題を作るのですか?」「なぜ、採択率を競走させるのですか?」という質問を受けることがある。「CBT の問題を作れと言われたから一生懸命作ったのに、専門外の先生がいろいろケチを付けて、作り直せという」「作問委員になったら、夜遅くまでブラッシュアップに付き合わされて、帰宅が夜の 10 時や 11 時になる。」「CBT の問題はいつも自分一人が作って、他の医局員は協力してくれない」という不満を耳にすることもある。そこで、今回、これらの疑問や不満を解消するために、共用試験実施評価機構の CBT に対する考え方を説明して CBT に対する理解を深めてもらうとともに、良い問題の作成方法、ブラッシュアップ方法について解説した。

CBT の実施機構とは、一体全体どのような組織なのだろうか。社団法人医療系大学間共用試験実施評価機構には、共用試験実施委員会と共用試験事後評価解析委員会があり、そのほかに共用試験制度・システム開発委員会や共用試験広報・推進委員会がある。共用試験実施委員会は医学系と歯学系に分けられ、それぞれに CBT 実施小委員会と OSCE 実施小委員会がある。共用試験事後評価解析委員会も医学系と歯学系に分けられ、それぞれに CBT 事後評価小委員会と OSCE 事後評価小委員会がある。そして、歯学系 CBT 実施小委員会の中にブラッシュアップ専門部会、問題作成 FD 専門部会、問題プール化専門部会がある。ブラッシュアップ専門部会では、全国から集められた CBT 問題のブラッシュアップを 9 日間費やして行っている。ブラッシュアップ専門部会の委員は予防歯科学、生化学、解剖学、生理学、細菌学、病理学、薬理学、歯科理工学、歯科放射線学、歯科麻酔学、口腔外科学、歯科保存学、歯科補綴学、小児歯科学、歯科矯正学など、各専門分野から選出された教授により構成されている。

なぜ、CBT が必要なのだろうか。講義や実習では当然ながら学生が患者さんを診ることはない。しかし、臨床実習では患者さんを診なければならないし、治療もしなければならない。ここに大きなギャップがある。講義や実習でいくら説明しても実際の患者さんの様子は学生にはなかなか理解できない。このギャップを埋めるのが CBT である。CBT を実施することにより講義や実習で修得した知識や技術が円滑に臨床実習の場に生かすことができる、CBT に合格した学生のみが臨床実習を行うことができるし、逆に臨床実習に対応できないような知識不足の学生は患者さんに対して歯科治療を行う資格はない。患者さんは決して学生のもっともらしい顔ではないからである。臨床実習に進級できるくらいの知識があるか否かを問うのが CBT である。このように考えると、CBT の必要性がよくわかるし、CBT を臨床実習直前の進級判定基準として実施する理由も容易に理解できる。

なぜ、視覚素材が重要なのだろうか。臨床実習で初めて患者さんの歯肉を診ても実際の発赤や腫脹がわからなければ歯肉炎と診断することはできない。ましてや歯肉炎を治療することはできない。たとえ歯肉炎の治療法が知識として頭の中で列記できても、患者さんの歯肉を診て、歯肉炎が起こっているのかいないのかがわからなければ、その知識は臨床的意味を持たない。「これが歯肉炎だよ。わかっているかい?」と学生に示すためには、典型的な歯肉炎の写真が必要になる。全く同じ理由により、典型的な唾石の写真、典型的な歯牙腫の写真、典型的なガマ腫の写真、典型的な白板症の写真、典型的な骨折の

レントゲン写真、病理組織写真などなどが必要になる。だから、視覚素材が重要なのである。視覚素材がなければ、口頭でいくら饒舌に述べても学生の理解は得られない。「百聞は一見にしかず」である。

なぜ、写真は美しくないダメなのだろうか。もしも写真がピンボケで汚かったら、学生はどこを見てよいかわからない、どこが骨折線なのかわからない、矢印がどこを指しているかわからない、病理組織像が鑑別できない、診断できない、ということになってしまう。これでは CBT において、きれいな写真を見ている学生と汚い写真を見ている学生との間に不公平が生じてしまう。受験生はそれぞれ違う問題を解いているために、このような不公平が生じてしまうのである。ここが国家試験と根本的に違うところである。

なぜ、連問では異なる写真が要るのだろうか。CBT の問題形式には、タイプ A＝単純 5 肢択一形式、タイプ W＝順次解答 2 連問、タイプ Q＝順次解答 4 連問、タイプ L＝多選択肢 2 連問、タイプ R＝多選択肢 4 連問の 5 つの形式があるが、W 問題の 1/2 で疑わしい疾患名、2/2 で病理組織像の特徴を問う問題において、もしも 2 問とも視覚素材が全く同じ口腔内写真だったら、2/2 で病理組織像の特徴を答えさせているのに写真が口腔内写真ということになってしまい、写真を見せている意味がない。これでは、患者さんの口腔内を診ただけで確定診断することになり、病理診断は必要ないということになってしまう。これは実際の臨床とは異なる。実際の臨床では、口腔内を診て、口腔粘膜の異常を疑い、病理組織像を見て確定診断するわけだから、学生は病理組織像を観る能力が必要であり、われわれはそれを教えないといけない。だから、1/2 の問題は口腔内写真で、2/2 の問題は病理組織像の写真でなければならないということになる。すなわち、口腔内写真と病理組織写真の 2 種類の異なる写真が必要になるのである。これが CBT における視覚素材の基本的な考え方である。すなわち、写真を見せて答えさせる問題は写真を見なければ答えられない問題であり、写真を見なくて解けるような問題は写真を見せる意味がないという訳である。

Q 問題において、もしも 4 問とも視覚素材が同じだったら、どうだろうか。1/4 では、初診時の口腔内写真を見せて必要な検査を質問する。まず口腔内を診てから、診断を下すために検査をする必要がある。2/2 では、検査で慢性歯周炎と診断したので、次にエックス線写真を提示して、歯槽骨の状態から、どのような治療を行うかを質問する。3/4 では、ブラッシング後にスケーリングとルートプレーニングを行うことに決定したので、その治療に必要な器具を選ばせる。4/4 では、治療を行ったあとに、どのような症状が出現しやすいかを質問する。このように、検査をして、治療法を決定して、治療器具を選んで、術後の予後について述べるという、時間的経過に沿って問題が作成される。これはまさに臨床で歯科医師が日常行っている時間経過そのものであり、写真もその時間経過に沿って変化するのは、むしろ当たり前、つまり写真は 4 枚とも異なっても当然といえる。ということは、4 種類の異なる写真が必要になってしまう。これが CBT の連問における視覚素材の基本的な考え方である。日常臨床で歯科医師が行っている歯科治療の時間的経過に従って、学生がいかににも体験しているかのようなシミュレーション問題を作成する必要がある。したがって、作問者は同じ患者を長期間にわたり写真取材しなければならない。

なぜ、毎年、新作問題を作る必要があるのだろうか。CBT の試験中に後方の席から前方の PC 画面が見えてしまうことがある。これはカンニングをしているという意味ではなく、いくらパーティションを置いても後方からは前方の画面が見えてしまうのである。また、CBT 問題に関して、学生には守秘義務がある。にもかかわらず、一部の学生が他学年の学生に、あるいは他大学の学生に問題情報を流すことがある。学生が故意に漏洩しなくても雑談をしているうちに無意識的にしゃべってしまうこともある。さらに、出版業者が CBT の問題集を発売しているので、全く同じ問題を削除せざるを得ない状況になっていることも事実である。これはなかなか規制が難しい。全く同じ問題ないしはきわめて類似した問題が掲載された問題集はよく売れるからである。そして、前述のように、全国の大学から多くの問題を集めても、視覚素材が不鮮明でなかなか良問が残らないということもある。視覚素材が不鮮明では学生間に不公平が生じてしまうからである。このように、いろいろな理由により膨大な量の問題が必要になるのである。

なぜ、機構は大学間で採択率を競走させるのだろうか。競走させるというよりも、前述したように、よい問題がたくさん欲しいのである。順位をつけることにより各大学で競争意識が芽生えて採択率が上昇すればよい問題がたくさん集まるというわけである。つまり、良問を集めるための手段なのである。ブラッシュアップ専門部会では、よい問題を集めるために各大学から送られてきた問題をなるべく採択しようと努力に努力を重ねていろいろな修正を加える。文章は修正できても視覚素材は修正できない。切り取りはできるが、ピンボケ写真や汚れた写真はどうしようもない。だから、視覚素材が悪いと、どんなに問題文が優れていても採択されないということになる。実際、非常に残念な問題が多々ある。

4/6以下の問題とは4年生までに習った問題という意味なのだろうか。4/6とは6年間のうちの4年次までの知識ということであるが、この説明では各大学のカリキュラムによって異なってしまう。たとえば、鹿児島大学の歯科麻酔学講義は5年次の前期に設定されているので、歯科麻酔学の問題は作れないということになってしまう。4/6ということは、換言すれば、「国家試験や卒業試験よりも簡単な問題」という意味であり、必ずしも4年次までに教えた内容に限るという意味ではない。実際に CBT を受験する学生は臨床実習直前だから、すべての専門科目は終了しているのである。つまり、あまり複雑にひねった問題はやめてくださいという意味なのである。さらに想像を逞しくすれば、この4/6という言葉は私立大学の発想なのである。私立の歯科大学では4年生までにすべての講義が終了している。国試対策に十分な時間をかけなければならないからである。だから、われわれは、この4/6という言葉に惑わされてはいけないのである。

問題文作成時にはどのような注意が必要なのだろうか。作問方法のマニュアルを参考にすればよいのだが、特に多い間違いについて説明すると、主文では、年齢と呼び名、女性、女子、女兒などに注意する。「AおよびB」は「AとB」と書く。「A、B、C」は「A、BおよびC」と書く。連問では前問の答の部分は段落を変えて1文字あける。写真を示す場合は、「○の写真を示す」あるいは「○を写真に示す」と書く。「○○の過程を示す」は「○○の一過程を示す」と書く。左側下顎第一大臼歯と書かないで歯式で入力する。「写真を示す」「図を示す」は主文の最後に置く。ただし、図中の(ア)(イ)を説明するときは例外である。副文では、「○○の特徴で正しいのはどれか」は「○○の特徴はどれか」と書く。「まず行う処置はどれか」は「最初に行う処置はどれか」と書く。「診断はどれか」は「診断名はどれか」あるいは「考えられるのはどれか」と書く。選択肢では、組み合わせを問う場合は、選択肢に中線(一)が要る。単語が2文字なら間にスペースを入れる。図表では、模式図の線がギザギザにならないようにスムーズに描く。図中に示す記号(選択肢も)は(ア)(イ)と括弧を付ける。図中の記号は時計回りだが、見にくい場合は例外である。パノラマ写真は原則として切り取らない。ただし、このことに関しては意見が分かれているので、今後検討する予定である。写真が2枚あるときは、くっつけずに少し離す。病理組織像で強拡大を示すときは、弱拡大の中に□で囲って強拡大を示し、両方の組織像を提示するのがよい。患者の顔写真は下半分でないとダメ。ボランティア(医局員)は顔全体を出してよい。この場合、承諾書を添付するように書いてあるが、実際には添付しなくてよい。

最後に、良問を作るコツはないのだろうか。「くっきり、明るい、きれいな画面」という視覚素材のキャッチコピーと「すっきり、はっきり、慣用句」という問題文のキャッチコピーを覚えておくとうわりやすいと思う。要するに、問題文は簡単明瞭に、論文の要約のように書く。ダラダラと回りくどい文章はダメ。ということは、つまり学生が読みづらく、学生間で不公平が生じてしまうという意味である。字数制限は文章が冗長にならないためのひとつの目安に過ぎない。

以上のように、要するに、基本は、学生間で不公平が生じないように問題を揃えるということである。学生はそれぞれ異なる問題を解いているので、どうしても不公平が生じてしまう可能性がある。ここが国家試験と違う点なのである。個人で CBT 問題を作成したら、必ず医局内でブラッシュアップを十分にを行い、よい問題に仕上げてから WG に提出する。そうすれば、歯学部内のブラッシュアップ WG でケチを付けられることもなくなり、被害者意識も解消するであろう。夜遅くまでブラッシュアップに付き合うこともなくなる。そして、鹿児島大学歯学部の CBT 採択率も必然的に上昇して、機構には良問が多く集まるということになる。これはすべて学生のために行っているのであり、将来有望な素晴らしい歯科医師を教育するためのわれわれの義務でもあるということを理解していただきたいと思う。

(講演 3)

CBT 問題作成の基本的手順について

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 先進治療科学専攻
顎顔面機能再建学講座 口腔顎顔面外科学分野
西 原 一 秀

CBT 問題の作問は問題入力システム QED ver. 5.0 (以下、QED) を使用して行われるが、QED は複雑な入力操作を必要とし、さらに、CBT 作問では決められた語句・用語を使用しなければならないなど制限が多く、多くの教員が作問・入力に戸惑っているのが現状である。

そこで、今回、問題入力システム QED ver. 5.0 の問題作成の基本的手順を「鹿児島大学歯学部 CBT 作問ガイド -QED の簡易マニュアル- (以下、作問ガイド)」を参考に、コンピューター画面上で QED を実

際に操作し、解説した。

QED は大学から提供された入力ソフトを用いて各自インストールすることが可能であるが、現在は Windows のみで使用できる。QED は初めの画面で作問者を講座名を含めて表記し、問題作成を開始する。次の画面が問題入力画面となっており、基本的には2画面で問題を作成する。

問題入力では主文、副文、選択肢のいずれも 11 ポイントのフォントサイズを使用し、主文、副文の冒頭は必ず 1 文字空白にしなければならない。選択肢の適正度は、②正解か 0 不可のいずれかを選択する。図、画像は直接 JPEG ファイルから入力し、問題文、選択肢、図、画像のレイアウトは規定されたレイアウトパターンの位置関係に配置する。求められる学力 (Taxonomy) は「Ⅱ：分析/統合/解釈する力 (分析・解釈)」を選択するような問題作成が求められ、学生が問題解答に要する所要時間は「1 分」とし、必要度は「必須」、難易度は「平易」を通常選択して入力する。

以上のような方法で問題を作成するが、提出問題や作問情報がコンピューターで洩れないようにセキュリティを充分に行うことが必要である。

参考資料： 鹿児島大学歯学部 CBT 作問ガイド -QED の簡易マニュアル-

(講演 4)

CBT 問題作成のための視覚素材の作成方法と IT スキルについて

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 先進治療科学専攻
腫瘍学講座 顎顔面放射線学分野
岩下 洋一朗

CBT 問題作成のための視覚素材の作成方法と IT スキルについて要点を示した。

まず、簡易マニュアル(鹿大歯学部 CBT 作問ガイド三部作)に要点はほぼ全て記述しているのでそちらを読んでほしい。作問ガイド(2)視覚素材の作り方にあるが、日頃から CBT のためによい画像を集める必要がある。よい画像とは、日常的な、ありふれた、典型的な、非常にわかりやすく、フォーカスのあった、フレームのよい、明るさが適正な画像である。日頃から撮影、整理しておく必要がある。CBT 用と学術用は別にした方がよい。

重要なことは、最初にスキャンするときの画素数、濃度分解能に注意することである。画素数は後で増やせない。濃度分解能も後で増やすことは出来ない。フィルムをスキャンするときは、デンタルフィルムの分解能は 600dpi 以上で、自動濃度調整ボタンがあれば使用するようにする。PowerPoint などで作図したときは、元のファイルは必ず保存する。(ファイル名は ori-xxx. ppt のようにつける。)

最終画像ファイルは 500 x 400dot, 72dpi が基準である。提出する際は ori-, mid, final を準備する。Final は出来るだけ JPEG 画像ファイル(拡張子名. jpg)で提出する。

CBT のための IT のスキルについて、セキュリティ、メールについて注意しなければならない。

セキュリティについては、OS, ソフトウェアのアップデート、ウィルス対策ソフトは必須である。パスワードは必ず設定する。スクリーンセーバーにもパスワードをつける。ノートパソコンでの運用に注意する。特に盗難とデータの流出には要注意である。Winny などのファイル交換ソフトは禁止されている。

メールについては、できるだけテキストメールを使用し、HTML メールは使用しないようにする。必ず宛先の確認を (cbt-wg と通常のメールの区別) する。特にメーリングリストの返信時には注意する必要がある。

一般的な IT のスキルについては鹿児島大学歯学部情報ネットワーク委員会 作業部会のホームページ (<http://www.hal.kagoshima-u.ac.jp/net-wg/index.html>) を参照する。歯学部のホームページからリンクがある。

FD 研修会写真



アンケート結果

結果

質問内容	はい		いいえ	
1. 過去にC B Tの作問をしたことがある。	72		18	
2. C B Tのブラッシュアップをしたことがある。	57		33	
3. 作問のために視覚素材を集めたことがある。	75		15	
<そう思わない・・・そう思う> 1234				
1. 組織的活動として有意義であったか。	4	5	44	37
2. 企画内容は適切であったか。	3	10	44	33
3. 時間、場所等は適切であったか。	3	13	47	27
4. 個人的に成果は得られたか。	4	16	44	26
5. 今後もこの様な活動は必要か。	3	12	45	30
6. 上記項目やその他の反省点、改善点などがあれば、自由にお書き下さい。	・FD研修会を教員に行うことは良いことだと思う。しかし、助教等の尻をたたき前に教授の先生方に温度差があるように思われる。やはり全員の教授が参加するのが前提ではないでしょうか？（教育に熱心な先生はいつも顔ぶれが決まっています。）			
	・とても良かった。・分かりやすくて良かった。			
	・最後の採用までの努力が良くわかった。			
	・CBTの意義が良く理解できた。			
	・（作問未経験）実際に作問を行えば見えてくるとは思います。現段階では分からないことばかりです。			
	・本当に参加して理解してほしい人が不参加だった少なくとも責任ある立場の人は全員でほしい。			
	・教員全員が参加する内容でしょうか。作問したことがない、又は非協力的な教員が参加すれば良いと思います。			
	・対象は新任教員でも良い。			
	・機構の情報として、不要な作問があれば作問の前に早めに教えてほしい。			
	・参加者数をもっと増やす方が良いと思います。（教員全員参加にしてもいいと思います。）			

第3節 歯学部FD講演会

平成19年度の歯学部FD講演会は下記の要領で行われた。

実施責任者：歯学部FD委員会委員長 馬嶋 秀行

日時：平成20年3月27日（木） 17:00～18:00

場所：歯学部第1示説室

講師：福岡歯科大学・全身管理学講座画像診断学分野教授 湯浅賢治先生

鹿児島大学歯学部FD講演会

IT歯科医療時代の歯学教育

講師：湯浅 賢治 先生

福岡歯科大学 診断・全身管理学講座
画像診断学分野 教授

日時：平成20年3月27日（木） 17:00～

場所：第1示説室

対象：教職員

概要：

歯科医療におけるIT化が望まれている。歯科医療におけるIT化では、電子カルテ及びPACS (Picture Archiving and Communication System) の実践を行わなければならない。しかし、大学病院等の多様性を有した比較的大型歯科病院では、診断機器等多様であり、電子カルテ化のレセプト対応等の問題もある。また、IT歯科医療における教育にも工夫が必要である。今回、福岡歯科大学における電子カルテおよびPACS化の実践に携わられた湯浅賢治教授をお招きし、「IT歯科医療時代の歯学教育」のご講演をお願いいたしました。ふるってご参加ください。

ご来聴を歓迎します。

鹿児島大学病院副病院長
歯学部FD委員会委員長

鳥居光男（内線6190）
馬嶋秀行（内線6270,6272）

要旨

IT 歯科医療時代の歯学教育

福岡歯科大学・全身管理学講座画像診断学分野

湯浅賢治

1. 福岡歯科大学医科歯科総合病院の概要

福岡歯科大学医科歯科総合病院は頭頸部を中心に歯科のみならず医科についても診療を行う病院である。口腔医学を目指している。

2. 本学の登院前および臨床実習の概要

本学の登院前および臨床実習スケジュールとして、5 年生は 4 月から 6 月に登院前実習を行い、6、7 月に OSCE, CBT を行い、共に 60 点以上で臨床実習へあがる。臨床実習期間は 5 年の 9 月から 6 年の 7 月までである。

登院前の実習として、9 班（10～11 人/班）に分け、各科を 5 日/科でローテーションする。特徴として、介護老人施設があり、介護実習が 5 日間含まれる。

臨床実習では、16 班（6～7 人/班）に分け、各科をローテーションする。また、外科、内科もローテーションする。見学型から診療参加型へ移行中で、学生あたりに患者を配当し、学生は患者 1 人を連れてくる必要がある。

3. 病院の IT 化

本学の中期構想で病院の IT 化の推進が 2005 年に決まった。デジタル社会への学生の対応、デジタル情報の教育を目的としている。導入申請に当たって、2011 年には医療機関の診療報酬明細の電子化請求が義務づけられている、このような時代の要請から、生の医療情報を扱う臨床実習において、これらのデジタル情報に関する教育を行うことが重要であるとした。

HIS 導入の経緯としては、2002 年 4 月に口内法を除く画像のデジタル化、PACS が導入された。2003 年 4 月に HIS 検討委員会が設置され、2005 年 5 月に福岡歯科学園の中期構想の策定で、「病院の IT 化を推進する。」と決定され、2006 年 3 月より仕様書原案の作成、2006 年 12 月に仕様書が作成され、HIS の導入企業が決定された。2007 年 7 月に PACS の更新を含む HIS が稼働している。

HIS 導入の基本姿勢としては、なじみやすく、便利になったと思うシステムを目指し、発生源入力のためだけに情報入力を行うことを避けた。端末に情報を入力し、かつカルテにも同じことを記入することを避けた。また学生にとって卒後に有用であることを考え、歯科用レセプトコンピュータを導入した。また、オーダーリングのみ電子化するか、医科電子カルテまで導入するか検討した。法人からの要望で診療予約システム導入により、予約台帳をなくし、歯科用チェアの効率的運用を行うことを目的とした。導入経費を抑えるために、オーダーメイドのシステムは無理で、既成のシステムを導入し、導入システムに本院のシステムを合わせた。説明会で教職員に「ユニクロで洋服を買うようなものです。選べるのはサイズと色くらいです。そのつもりで!」と言い続けた。

導入の要件として、1 回のオーダー入力でレセプトの作成、電子カルテへの入力、保険請求の漏れの確認、さらにレセプト監査を可能にする必要がある。また、画像については、PACS からの画像を電子カルテに入力できるようにする必要があった。

導入への問題点として、200 台以上の歯科用レセプトコンピュータを LAN で結ぶことができるかという問題があった。また、歯科用レセプトコンピュータにはオーダーリング機能がないため、医科用のオーダーリングシステムとの連携が必要になり、ひとつのプラットフォームではなく、複数のメーカーで連携する必要があった。引き受けるメーカーを探して見つけることができた。また、医療情報を管理する医療情報室などの専門の部署が無く、放射線科が中心となって行った。臨床検査室は装置の老朽化によりネットワークに対応せず、更新した。

システム構成としては、NEC とメディアの二つのメーカーが協力し、NEC のオーダーリングシステムがメディアの歯科カルテレセプトシステムと連携し、画像については、GE の PACS を接続した。これにより、オーダー情報・請求情報は連携し、レセプト作成、電子カルテ、保険請求、およびレセプト監査まで可能なシステムを構成した。情報端末数は 212 台、プリンターは 78 台で、病院の各科、各講座の研究室、および介護実習施設に設置された。再来患者は受付を通した後はカルテ等を持たずに直接各科へ行くことができる。カルテは電子化されたが、最終的に印刷して残した。患者が受診すると各診療科に外来基本カードが出る。診療室にはチェア一台に一台ずつ端末がある。カルテは追記印刷するようになっている。患者一覧より患者のカルテを開き、歯科用カルテを開いて入力する。図についてはあらかじめパターンを入れておき選んで書き加えるようにした。

予算がないため、自作システムとの連携を行っている。メーカーに依頼するのでなく自作した方が使いやすい、カスタマイズが自由である。ファイルメーカーで作成するようにした。PACS を接続し、HIS の端末で画像の閲覧が可能にした。口内法の写真はスキャンしてサーバーへ転送した。これらは実習室、セミナー室にも設置され、臨床実習に利用されている。

4. Web 教材

Web を用いた教材を作成し、講義、実習に役立てている。歯科放射線の基礎について、動画を用いたわかりやすい教材を作成し、ホームページを公開している。歯科放射線学会のホームページよりリンクされている。

IT 歯科医療時代の歯学教育

福岡歯科大学診断・全身管理学講座画像診断学分野

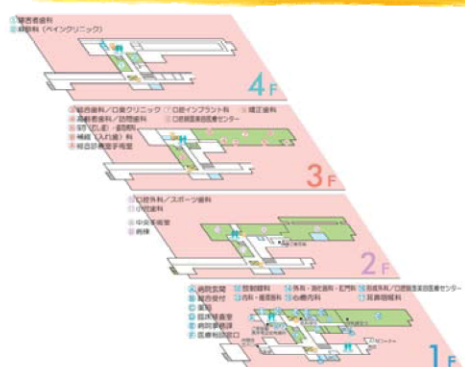
湯浅賢治

2008年3月27日 鹿児島大学

講演の内容

1. 福岡歯科大学医科歯科総合病院の概要
2. 本学の登院前および臨床実習の概要
3. 病院のIT化
4. Web教材

福岡歯科大学医科歯科総合病院の概要



本学の登院前および臨床実習の概要

本学の登院前および臨床実習スケジュール

5 年生

4/14～6/20 (1～3 限) : 登院前実習

6/29 : OSCE (共に60点以上で臨床実習へ)
7/ 4 : CBT

9/8～3/13 : 臨床実習 (I 期)

6 年生

4/7～7/9 : 臨床実習 (II 期)

登院前実習の内容

1. 9班 (10～11人/班) に分け、各科をローテーションする (5日/科)。
2. 介護実習が含まれる (5日間)。

介護老人保健施設



介護老人福祉施設

臨床実習の内容

1. 16班（6～7人/班）に分け、各科をローテーションする。
2. 外科、内科もローテーションする。
3. 見学型から診療参加型へ
 - 1) 2患者/学生に患者を配当
 - 2) 学生は患者1人を連れてくる。

病院のIT化

1. 本学の中期構想：病院のIT化の推進（2005年）
2. デジタル社会への学生の対応（デジタル情報の教育）

我が国の高速度情報通信ネットワーク社会推進戦略（e-Japan）の推進が行われ、歯科医療においても従来のアナログ情報からデジタル情報へと急速に進んでいる。2011年には医療機関の診療報酬明細書の電子化請求が義務づけられている。

このような時代の要請を考慮すれば、歯科教育の中においてもデジタル化された医療情報の有効な使用法、運用法、およびデジタル化に惹き起こる情報の大量増減やウィルスの感染等の危険性に対する対応、管理および保険診療指示の理解・運用やデジタル保険情報の取り扱いに関する十分な教育が必要である。特に、生の医療情報を扱う臨床実習において、これらのデジタル情報に関する教育を行うことが重要である。

（HIS導入の経緯と導入の経緯について詳しくは、別添の資料を参照）

HIS導入の経緯

2002年4月	画像のデジタル化（口内法を除く）PACSの導入
2003年4月	HIS検討委員会設置
2005年5月	福岡歯科学園の中期構想の策定 「病院のIT化を推進する。」
2006年3月	仕様書原案作成 HIS仕様書提案企業 ・ NEC+メディア ・ ソフトマックス+メディア ・ 富士通 ・ 日立
2006年12月	仕様書作成
2006年12月	NEC+メディアに決定
2007年7月	HIS稼働（PACSの更新を含む）

HIS導入の基本姿勢

1. なじみやすく、便利になったと思うシステム
2. 発生源入力のためだけに情報入力を行うことを避ける。（端末に情報を入力し、かつカルテにも記入することを避ける。）
3. 学生にとって卒後に有用であること。
4. オーダリングのみか、医科電子カルテまで導入するか？
5. 診療予約システム導入により、予約台帳をなくす。
6. 歯科用チェアの効率的運用を行う。

歯科用レセプトコンピュータの導入

法人からの要望

HIS導入の基本姿勢

7. 導入経費を抑える。

オーダーメイドのシステムは無理
既成のシステムの導入

導入システムに本院のシステムを合わせる。

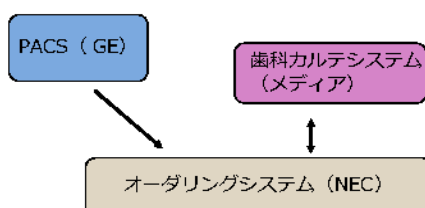
↓
説明会で教職員に言い続けた事

「ユニクロで洋服を買うようなものです。選べるのはサイズと色くらいです。そのつもりで！」

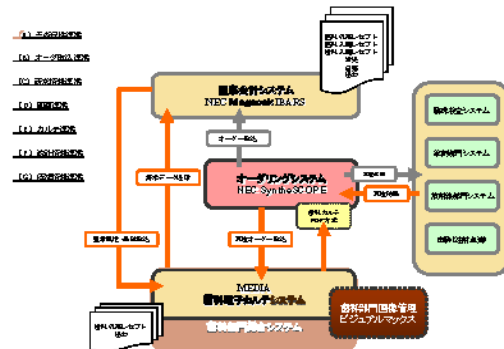
導入への問題点

1. 200台以上の歯科用レセプトコンピュータをLANで結ぶことができるか？
2. 歯科用レセプトコンピュータにはオーダーリング機能がない。
→ 医科用のオーダーリングシステムとの連携
→ ひとつのプラットフォームではなくなる。
3. 医療情報を管理する専門の部署がない。（医療情報室がない。）
4. 臨床検査室の機器の老朽化

システム構成



オーダー情報・請求情報連携



第4節 卒業時アンケート

■ 卒業時アンケートの実施方法と結果

卒業時アンケートは昨年と同様に歯学部卒業式会場においてアンケート用紙を配布し、19年度卒業生全員、61名を対象に実施し、56名分の回答を得た。以下の18項目について歯科医師になる立場で、「5点：極めて有効、4点：どちらかといえば有効、3点：どちらとも言えない、2点：どちらかといえば無意味、1点：全く無意味であった。」の評価を集計した。

項目(結果)：合宿オリエンテーション(3.79)、共通教育(3.59)、専門・導入系科目(3.79)、専門・基礎系科目(3.98)、専門・臨床系科目(4.23)、専門・医系科目(3.94)、専門・臨床実習(4.24)、専門・選択科目(3.11)、共用試験 CBT(3.95)、共用試験 OSCE(3.98)、卒業試験(4.07)、チューター制度(3.45)、課外活動サークル等(4.30)、学術情報基盤センター(3.73)、図書館(4.31)、学習室(1, 2 示説室等)(4.27)、学生控室(4.16)、学務事務室(3.78)。

今年は56名の回収の中で若干の書き込みしかない。また、感情論だけのような内容が多い。各項目の評価においては、昨年とほぼ同じ傾向である。すなわち、直接関係する事項である専門・臨床系科目、専門・臨床実習、図書館、学習室、学生控室に、高い評価が得られている。また、課外活動(サークル等)は精神的な支えとして重要な活動であることがわかる。昨年、3点台の評価であった、卒業試験が4点台になっており関係者としては喜んでいる。一方、1, 2年生時の経験となる合宿オリエンテーション、共通教育、学術情報基盤センターは依然3点台の低い評価となっている。また、共用試験(CBT、OSCE)およびチューター制度など、教職員が苦勞して実施している行為に対する評価も比較的低い。歯科医師国家試験に合格するために直接関係するような教育事業・行事・施設に対してのみ評価が高く、全人的教育をしてきたつもりの教職員としては残念である。

平成 19 年度卒業時アンケート集計結果

歯学部教育委員会・歯学部 FD 委員会

実施日：平成 20 年 3 月 25 日（火）

場 所：卒業式会場（第 3 講義室）

対象者：平成 19 年度卒業生全員（61 名）

回収数：56 名分

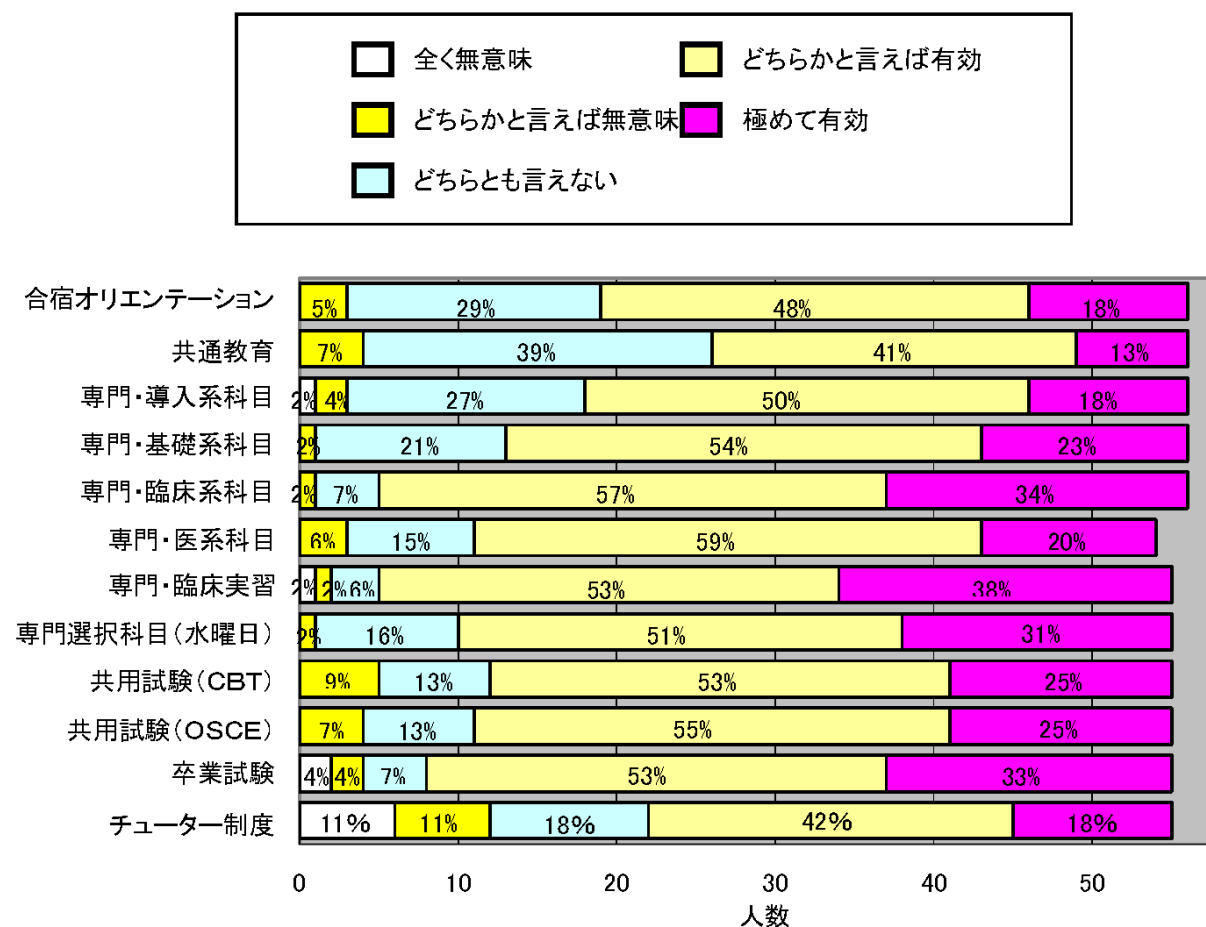
	鹿児島県	鹿児島以外の九州	左記以外
出身	16 名	17 名	23 名
研修先	28 名	11 名	17 名

結果

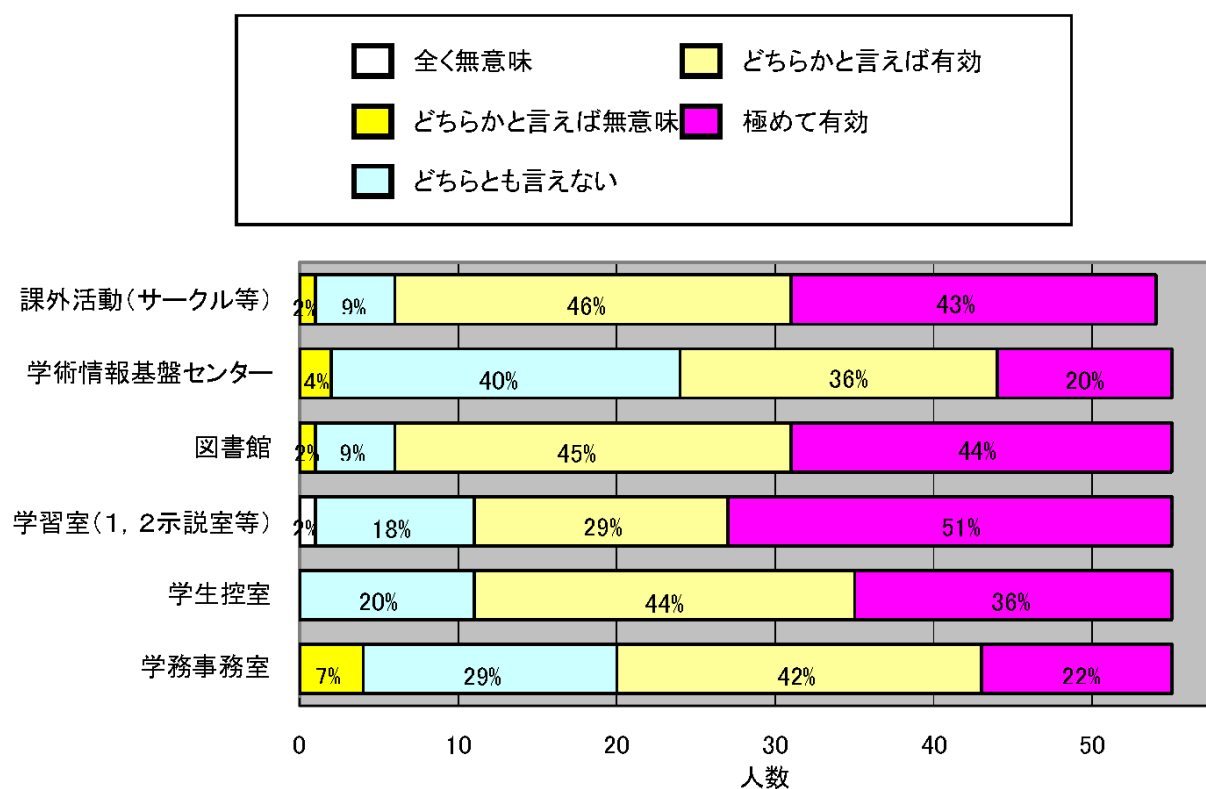
以下の 18 項目について歯科医師になる立場で、「5 点：極めて有効、4 点：どちらかといえば有効、3 点：どちらとも言えない、2 点：どちらかと言えば無意味、1 点：全く無意味であった。」の評価を集計した。

項目	平均評価点	
	2008. 3. 25	2007. 3. 23
合宿オリエンテーション	3.79	3.33
共通教育	3.59	3.42
導入系科目	3.79	3.53
基礎系科目	3.98	3.83
臨床系科目	4.23	4.35
医系科目	3.94	3.86
臨床実習	4.24	4.48
選択科目（水曜日）	4.11	3.90
共用試験（CBT）	3.95	3.87
共用試験（OSCE）	3.98	3.89
卒業試験	4.07	4.10
チューター制度	3.45	3.77
課外活動（サークル等）	4.30	4.02
学術情報基盤センター	3.73	3.63
図書館	4.31	4.26
学習室（1, 2 示説室等）	4.27	4.26
学生控室	4.16	3.80
学務事務室	3.78	4.22

教育事業/行事に関する事項



教育事業/行事に関する事項



第5節 今後の展望

これまで継続して来た活動を、より実質的な授業改善に繋がる様な活動に進化させ、また、現在進行中の歯学部カリキュラム再編とも併せて、シラバスの充実や教育スキルの向上とともに、教員による教育改善を支援する組織的な活動を一層、進展させなければならないと考えている。

(文責 歯学部 FD 委員会)

第6節 平成19年度FD活動経費決算報告書

学部等名	歯学部				
報告内容 (実施概要)	1. 各種アンケートや学部内報告書作成 (24,466 円) 2. Web による FD 情報提供等の学部内サーバー整備 (180,994 円) 3. ワークショップや講演会等の FD 活動推進環境整備 (41,500 円)				
金 額	物品等購入費	職 員 旅 費	講 師 等 旅 費	報 酬	決算額計
	円 246,960	円	円 33,040	円 20,000	円 300,000
費 目 内 容	区 分	数 量	金 額	経 費 内 訳 等	
	物品等購入費		円 180,994 41,500 24,466	歯学部ネットワーク端末本体・アダプタ・メモリ FD講演会用フロアスクリーン 事務用品 (ファイル・消しゴム・鉛筆・コピー用紙)	
	職 員 旅 費		円		
	講 師 等 旅 費		円 33,040	福岡歯科大学・湯浅賢治氏 (H20. 3. 27～3. 28)	
	報 酬		円 20,000	同・湯浅賢治氏 (H20. 3. 27)	
	計		円 300,000		